

平壤6月9日高等中学校・軽音楽部

ファンキー末吉

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

プロローグ…北朝鮮？ いいですよ、行きましょ!! 6

第1章

平壤をロックに染めてやる!

13

北朝鮮の思い出／ぺらぺら紙の北朝鮮へのビザ／突然のテポドン発射／「案内人」という名の「監視員」
／6月9日高等中学校に到着／平壤の街を歩く／3本しか弦のないギター／美少女たちが初めて触れる
「ロック」／「祖国解放戦争勝利記念日」に遊園地へ／人民と飲み、「瀬戸の花嫁」が歌われる／「ファンキー
さん、踊りましょ」／広場でドラムをぶっ叩く!!／逃げる!!／立ち上がって演奏ましょ!!

第2章

北朝鮮初のオリジナル・ロック曲

61

北朝鮮核実験の衝撃／禁制品を持ち込む／平壤空港再び／ニックネームをつけよう／初めてのMP3プレイヤー／ドラムの模範演奏／軍部からの中止命令／「ロック禁止、上等じゃねえか!!」／バスドラに描かれた「將軍様の花の絵」／ついにレコーディング開始!!／長靴を履いてきたカレン／アネゴが見せた、リーダーのプライド／宇多田ヒカルの衝撃／どちらのギターから録るべきか……／奇跡のアルペジオ／初めての「チョーキング」／初めての「ライトハンド奏法」／弾き切れるか——時間との戦い／関西人の嫁の功績／オデコが流した屈辱の涙／北朝鮮初のオリジナル・ロック曲「ムルムピョ(クエスチョンマーク)」／素晴らしい先生の愛／追いコン／アネゴの涙／目つきの悪い二人組／北朝鮮のキャバクラ嬢／テレビ放送、そして驚きの反響

第3章

チベットで発見した「ロックとは何か」

131

運命を変える曲が生まれたとき／チベットへ!!／ラマ僧の生活とは?／ラマ僧との問答——「音楽は人を救えるよ」／ロックとは何か

第4章

次世代の部員との本気のセッション

149

3度目の訪朝／オデコの時代／「末っ子」に心を持っていかれた／「豊年の春」のリハーサル／幼稚園児とセッションする!!／「テレビの魔力」／將軍様の歌はこの国の「ブルース」?／お弁当で局面打開／「心を開く」

第5章

新人類たちとのロック

173

苦難の時期／4度目の訪朝——バブルの平壤／先生との感動の再会／平壤の新人類／カラオケ・スナックに行く／好き嫌いをはっきり言う「新人類たち」／イヤなものにはイヤ!!／スラップ奏法を伝授する／ツンデレの部長に翻弄される／あの遊園地に行こう!／「ファンキーさん、お客さんですよ」／みんなで作詞をしよう!!／將軍様の愛のもと／学校へ行こう!　オー!!

はるかなる北朝鮮——さよなら愛弟子たち

213

Yahoo!ニュースで批判続出／中国マネーにのみ込まれる／金正日総書記死去／最後の渡航／タクシー・バブル到来／屋台のチョコバナナ／子供たちがどん引き／人民が流す涙の意味／新指導者を讃える歌／亡命／iPadという武器／時代の申し子たち／オシヤレして写真撮影／作曲ソフト「GarageBand」／部長の涙——心の放射熱

エピローグ

252

プロローグ… 北朝鮮？ いいですよ、行きましょ!!

「ファンキーさん、北朝鮮に行きませんか？」

荒巻正行と名乗る男から突然そう持ちかけられたのは、2006年の5月のことであった。

そのころ私は、中国は北京ペキンに拠点を移してもう久しかった。

もともとは1990年、北京で当時アンダーグラウンドだった「黒豹 (HeiBao)」というロックバンドと出会ってから、「俺は中国人になる!!」と言って毎月毎月北京に出かけては「将来は北京に移住したい」という夢を膨らませていたのだが、当時爆風スランプは「Runner」「リゾ・ラバ」「大きな玉ねぎの下で」などミリオンヒットを連発していて、すでに「バンド」というよりは「企業体」といえるほど巨大化していたので、会社や仲間多大な損害を被らせてまでそれを実現できる状態ではなかった。

それでもその夢が忘れられず、ついには「黒豹 (HeiBao)」のファンである中国人女性と国際結婚し、いつかは北京に移住したいと願いつつも、皮肉にもその夢は、その妻と離婚した2000年になってやっとかなえられることとなってしまった。

北京に居を移してからは北京を中心にスタジオミュージシャンとして、中国人歌手のためにア

レンジをしたり、プロデュースをしたり、バックバンドとしてドラムを叩いたり、中国映画の音楽監督などもやったりしてけっこう忙しく暮らしていた。

日本には、ラウドネスのボーカル二井原実や筋肉少女帯のギタリスト橘高文彦、その後活動を停止した爆風スランプのベーシスト和佐田達彦と組んだ「X:Y:Z」(エックスワイズイートゥーエー)というバンドがあり、北京からそのライブのために毎月毎月日本に出かけてゆく生活を送っていた。

「文化交流はねえ、スポーツだと勝ち負けが生まれるし、文学や絵画はリアルタイムじゃないし、歌は言葉の壁があるし、やっぱ楽器なんですよね。楽器を演奏したらその場の空気がひっくり返るぐらいの絶対的な腕を持っていて、共産圏に住んでいる日本人、それはファンキーさんしかいなかったんですよね」

荒巻は、時折ずれ落ちてくるメガネを指で押し上げながら私に熱く語った。

北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)への渡航歴が20回を超える荒巻は、あの国の映像を延べ500時間以上撮り溜めていて、「この国は大きく変わる」と肌で感じていた。その「時代の変化」を映像で伝える人間はどうしても日本人でなくてはならず、しかもいきなり日本などから連れてこられて「街に拒絶」されてしまうようでは使いものにならない、だから共産圏で暮らしている日本人でなければいけないのだという。

「映像を撮り溜めている」と聞くと隠し撮り映像をテレビとかに売りつけている輩やからを想像してしまいが、荒巻は自分は中国の大学に籍を置く「研究者」であるという。専門は東アジア学、中でも北朝鮮とチベットが専門であるという。

「日本に本当の意味での北朝鮮の社会学専門家というのはいないんです。あえて言うとな、実際にフィールドワークを展開しているのは世界中で僕しかいません。僕はこの経験から導き出す自分の理論を学会に発表して、今あるステレオタイプ化した北朝鮮の概念を覆すために、10年以上あの国に行き続けているんです」

難しいアジアと北朝鮮論をひとしきり喋った後に

「とりあえずこれ、見といてください」

荒巻からぽんと渡されたのは1枚のDVD。

『スクール・オブ・ロック』

ハリウッドの映画で、食えないロックミュージシャンの男が、友人になりすまして名門小学校の代用教員になる。男はいろいろトラブルを引き起こすのだが、結局はその小学校をロックに染めてしまうという映画である。

私は「ロック」という言葉に弱い。すぐに心動かされる。「ロック」とつけば何でも正しいと感じるぐらいそれは偏執的だった。

私が生まれたのは1959年なので、いわゆるウッドストック（・フェスティバル）やヒッピー文化よりは少し後である。また生まれ育ったのが四国は香川県の片田舎だったので、学生運動やそういう情報もあまり入ってこず、レコード店にも「ロック」や「ジャズ」というジャンル分けがない時代だったので、正直言って何が「ロック」なのか「ジャズ」なのかよく分かっていない。初恋の人にフラれたことにより大学を中退して、「東京に行つてロックをやる」か「ニューヨークに行つてジャズをやる」か、その程度の漠然とした感覚でしかなかった。

しかし結局は黒人音楽に傾倒し、「俺は黒人になる!!」と豪語しながら髪型をアフロヘアにして「ファンキー末吉」と名乗っていたんだから、何をもって「ロック」なんだという話ではある。

最初に中国に来たときは「ロックはないか？」と毎日探し歩いた。会う人会う人に拙い英語で聞いたが、答えは「没有」（ありませぬ）だった。

最終日にあきらめて、仲良くなったホテルのボーイに

「お前たち若者がいつも遊んでいるところに連れて行ってくれ」と頼んだ。

ボーイは周りを気にしながら、

「じゃあ、仕事が終わったらホテルの裏口で会いましょう」

と小声で言った。天安門事件の次の年、1990年当時の中国では、まだ人民が外国人と、ま

北朝鮮？ いいですよ、行きましょ!!

プロローグ

してやボーイと客が親しくするなんてのはあまり歓迎されることではなかったのである。

連れていかれたのは「音楽茶座」。なんてことない、カラオケが置いてあるパブのようなところであった。毎日「ロックはどこにある？」と聞いてきた音楽好きであろう外国人を連れてくるには、ボーイはここが最適だと思ったのだろう。

私はもうロックを探すのはあきらめて、そこに腰を据えて飲み始めた。カラオケは中国の曲だけでなく欧米の曲もかかっていたが、当時流行^{はや}っていたマドンナのカラオケ映像には、ちよつとセクシーなシーンにもすべてモザイクがかかっていた。そんな「時代」だった……。

何杯目かのグラスを空けたとき、私はふとその店のウェイターの着ているTシャツに目を留めた。1週間ほどの旅の中で長髪の若者などひとりも見かけたことのなかった中国だが、坊主頭のその若者はTシャツの袖を破いてノースリーブにして着ていた。「パンク」と呼べないことはない……。

「Is there any ROCK MUSIC in China?」

私がもう何度となく会う人会う人にしてきたその質問を発した途端、従業員控室のような小部屋から、別の若者が飛び出してきて私にこう言った。

「Oh!! Do you wanna Rock'n' Roll?」

見れば、ちよつとパンクスのような出で立ちではある。

以下、お互いの英語力のレベルがあまりにも低いので「英語の筆談」となってコミュニケーシ

ヨンが始まる。

「お前はラッキーだ。実は今夜ロックパーティーがある。バンドが4つ出る。俺は今からそれを見に行くんだ。よかったらお前も一緒に行くか？」

この言葉に私は小躍りしてテーブルを叩いて立ち上がろうとしたが、その場にいたすべての人間はそれを止めた。

「せっかく友達になれたんだ。どうしてあんな悪いヤツについて危険なところに行かなきゃならないんだ」

ホテルのボーイはそれこそ目に涙を溜めながら、必死で私を説得した。

私は身の危険を感じてはいたが、「ロック」という言葉の魅力的な響きの方がわずかに勝っていた。

「パーティーは4時に終わるといふから、5時までに帰らなかつたら大使館に連絡してくれ」

私は日本から一緒に来た仲間にパスポートと現金を託して、そのパンクスについて北京の地下クラブに行った。

あのころは中国だつてロックを見るのは命懸けだったのだ。

地下クラブでの黒豹 (HeiBao) との出会い。

「俺は中国でロックを見つけたんだ!!」という身体中の血が逆流するような感動。

その後の彼らとの熱い友情。

北朝鮮? いいですよ、行きましょ!!

プロローグ

ロックブーム……そしてロックの商業化……。

今、中国にはあのころのような熱いロックはもう……ない!!

「北朝鮮? いいですよ、行きましたよ!!」

私は荒巻に二つ返事でOKを出した。



第1章

平壤に着いて空港からそのまま連れていかれたのがこの学校。突き当たりの建物の2階に軽音楽部の部室があり、ここで子供たちとの魂の交流が始まることとなる。

平壤を
ロツクに
染めてやる！

北朝鮮の思い出

北朝鮮に正式に渡航するのは初めてなのであるが、実は一度だけ中国での仲間との悪ふざけで、中国国境の川、「豆満江」^{トマンガン}を越えて北朝鮮領に渡ろうとしたことがある。

あれはもう中国語も喋れるようになって、北京でもたくさんの方ができた1992年の冬のこと。爆風スランプが全盛だったそのころ、私はメンバー内でひとりだけ「心ここにあらず」で足しげく北京に通っていた。

爆風スランプが有名になることによって、私は日本では「芸能人」となってしまった。しかし、街で「ファンなんです」とサインをねだられても、「爆風の何をやってる人でしたっけ？」と言われる始末。

「日本一の、いや世界一のドラマーになってやる!!」

と家出してまで東京にやってきて、そのあげくにこの国の人たちは私が何のパートを演奏しているかすら知らないのだ。

しかし中国では違う。爆風スランプなど知りもしない中国のロッカーたちは、私のことをただの「ドラムの上手い日本人」としか見ていない。その日本人がいろんな中国のロックバンドを助け、黒豹 (HeiBao) たちもこのころには台湾のレコード会社からアルバムを発売し、中国ロッ

クの黎明期がまさに今、訪れようとしていた。

中国ロッカーたちとは最初のうち英語でコミュニケーションを取っていたのだが、自分のあまりの英語力のなさに、

「こりゃ、どちらかがどちらかのネイティブの言語を喋る以外に、コミュニケーションは無理だな」

と思いかけていたころである。

とっさのときに通訳も必要になるので、当時私は「中央戯劇学院」という大学の留学生寮を投宿先にして、その留学生の中から専属の「通訳」を見つけ、ヒマがあれば自分もその人たちと一緒に授業に紛れ込んで中国語の勉強をしていた。

私の「専属の通訳」ももう歴代3代目になっていて、その「金ちゃん」という在日韓国人の女の子の時代には一番いろんなことがあったと思う。

そんな中、金ちゃんの彼氏のムノ君が朝鮮族中国人であることから

「じゃあその実家におじゃまして、冬には凍っているという豆満江^{トマンガン}を徒歩で渡ってみよう」という話になった。

なぜ「北朝鮮」なのかはよく覚えていない。ちよつと前のパスポートまで、渡航先に「北朝鮮を除く」と書かれていて、私のパスポートはそれが乱暴に塗りつぶされているような時代だったので、「行ってはいけない」というなら行ってやろう、ぐらいの軽い気持ちだったのだと思う。

北京から27時間の列車の旅。することがないのでひたすら飲む。飲むと親交が深まる。この旅は、私が中国という多民族国家、そして朝鮮民族というものを理解する大きなチャンスとなった。ムノ君は、私や金ちゃんとの会話は中国語だが、朝鮮語はもちろんのこと、大学では日本語も勉強しているのでそこそこ喋れる。

「中国語に朝鮮語に日本語も？ 三カ国語も喋れてすごいねえ」と言うと、大きく首を振って

「二つだよ!! 朝鮮語は外国語じゃない。民族の言葉だよ」と言った。

その辺の感覚が「民族」という意識がない私たち日本人にはよく分からない。

逆に言うと、中国人には「在日韓国人」という感覚があまりよく分からない。NHKの「ハンデル講座」という番組名はもっと分からない。「朝鮮語」という呼び方を選択する方、そして「韓国語」という呼び方を選ぶ方、そのどちらにも配慮をしてこのような講座名にしたということだが、「ハンデル」というのは「文字」であって、「ハンデル講座」というのは、いってみれば「ひらがな講座」「漢字講座」みたいなもんで、ちよっとおかしいのではないか。

私はこの日から今に至るまでずっと「朝鮮民族の言葉」という意味で「朝鮮語」という言い方をしている。

ひとつの民族である朝鮮民族が、韓国と北朝鮮と、そして中国の東北地方というまったく違った国家制度の下で暮らしている。そして金ちゃんのように日本で生まれ育った「朝鮮民族」もいる。みんな同じ「同胞」なのである。

そしてこの旅には漢民族中国人である友人も同行していたが、日本で日本人と在日との関係が微妙なのに対して、朝鮮族中国人のムノ君と彼らの関係はいたって自然である。彼らは同じ「中国人」なのである。

世界中の人たちがこの旅の仲間のように、国だ制度だ民族だというのを度外視して「友達」という立場だけでいられたら……などと考えているうちに列車は終着駅「延吉」^{イエンジー}に到着した。

この日は延吉^{イエンジー}に1泊して、翌日車で小一時間の図們^{トゥーメン}にあるムノ君の実家に向かう。

この辺りを「延辺朝鮮族自治州」という。なるほど街角の看板にはハングルがあふれているし、街並みがちよつと懐かしい感じがするのは大日本帝国の占領による影響であろうか……街なかでは日本語が喋れる人もいて、ちよつと複雑な気持ちである。

金ちゃんの話では、日本に住んでいる在日の人たちはもとより、韓国人よりもおそらく北朝鮮人よりも、実はこの辺りに住んでいる朝鮮族中国人の生活の方が色濃く朝鮮の文化を残しているという。

人々が頭の上に荷物を載せて街を歩く姿などは、日本はもとより韓国でももう見られなくなっ

た光景だというし、何よりムノ君の実家で食事をご馳走になったとき、お父様は私たちお客さんと一緒に食事をして接待するのに対して、お母様やすべての女性は台所でそことは別に食事をするという文化には驚かされた。

息子の彼女として紹介された金ちゃんは、本来ならばその女性たちと共に台所で食事をするべきなのだが、日本で生まれ育って朝鮮語が喋れない金ちゃんを、この家では単なる「お客様」として迎えていたのではないかということ、**「特別に」**お客様の席と一緒に食事をしているんだよ、と後で金ちゃんが教えてくれた。

「じゃあ**图们江**まで行きますか!!」

「**豆満江**」トマンガンというのはこの国境の川の朝鮮での呼称で、中国では同じ川のことを「**图们江**」トゥーメンジャンと呼ぶ。

中朝国境の橋まで来た。昔はこの橋も行き来が激しかったそうだが、この夏（1992年8月24日）に中国が韓国と国交を樹立してから関係が悪くなり、それからずっとこうして閉ざされているらしい。

川の水は凍っていて、子供たちがその上で遊んでいる。

「下りてみようぜ!!」

子供たちが遊んでいるんだから大人が遊んだって別に構いやしないだろう……バカをやりなが



中国・延辺朝鮮族自治州の北朝鮮との国境の街「图们」(トゥーメン)の川にあった看板。中朝国境を示している。



凍った川の向こうは北朝鮮である。手が届きそうに近い。



向こう岸には兵士の姿も見える。

ら少しずつ北朝鮮側に移動してゆく。

川のちようど半分辺りになるとちよつと緊張感が生まれてきた。向こう岸には警備の兵士がいて、こちらを睨にらんでいる。

「ここはやめようぜ。もつと上流に人気ひとけのないところがあるから、そこから渡ろうぜ」

ムノ君がそう言うので一行はそこを引き上げた。

そのまま車で上流へと向かうが、なるほど川幅は狭くなるが、岸が高くなって今度は川まで下りるのが大変である。

「ここがよかろう」

こちら側は少々岸が高いが、あちら岸は低くてすぐに上陸できる。見張りも何もいないようだ。一行は苦勞して崖のような岸を下りていった。川まで下りればもう向こう岸はすぐである。

川半ばまで歩いて渡ったころ、金ちゃんが突然立ち止まって、前を進むみんなに向かつてこう叫んだ。

「やめようよ!! 危ないよ!! みんな帰ろ!!」

向こう岸はもうすぐである。人気もないのでまさか捕まるとは考えられない。みんな誰も引き返そうとはせずにどんどん進んでゆくが、金ちゃんは立ち止まったまま動かない。

彼氏のムノ君がわざわざ金ちゃんのところまで戻ってきて手を引こうとしたが、金ちゃんはその手をピシヤリと振り払ってこう言った。

「あんなたちはええわ、中国人やし日本人や。でも私は韓国人なんやで。捕まったらどんなことになるか分からんやろ!!」

ぺらぺら紙の北朝鮮へのビザ

あれから15年。まさか自分が、今度はちゃんと正規にあの国に入国することになるうとは夢にも思わなかった。

川を渡って密入国でもしなければ入れない国だと思っていたら、北京の北朝鮮大使館で申請すれば、よほど政治的な理由がない限り誰でも渡航できるらしく、日本にもちゃんとそれ専用の旅行社があり、ビザの申請からチケットや旅行の行程まで全部やってくれるという話である。

日本からの渡航だと必ず中国とか第三国を経由せねばならないので大変だが、私は別に日本に住んでいるわけではないので「北京—平壤」^{ペキン—ピョンヤン}の飛行機を取ればそれで事足りる。

「ビザが下りましたよ」

荒巻が笑顔でぺらぺらの紙を持ってきた。

北朝鮮のビザはパスポートにハンコを押されるのではなく、ぺらぺらの別紙に印刷されるのである。

中国を出国したら次の国への入国記録がないまま、再び中国に帰ってきたときの記録だけがパスポートに残る。パスポートに出入国記録が残らないということは、そのパスポートを調べただけではどこの国に行ったかは分からないということだし、裏を返せば帰ってこなければそのまま「出国したきり行方不明」ということである。

あのころと違って今では拉致問題が騒がれているし、国交がない国ということは大使館もないのだから、中国を出国したきりどこへ入国したかも分からず、そのまま行方不明になったとしてもそれはすべて「自己責任」である。怖くないと言えばウソになるが、まあ最初に北京の地下クラブに飛び込んだときよりは「命懸け」ではなからう。

社会主義国は往々にして「^{グアンシー}関係」、つまり「コネ」が何よりも大切であるということ、きつと中国も北朝鮮も同じであろうから、ここは荒巻の持つ長年のそれを信用するしかあるまい。

最初に中国に来てから16年、定住してもう6年、中国でも「^{グアンシー}関係」は相変わらず今でも非常に大切な生活のアイテムであるし、当時から想像できないほど発展した中国ではあるが、「^{グアン}関係」がなければ何もできないという現状は同じである。

つまり「^{グアンシー}関係」さえあればできないことは何もない、それが社会主義国共通ルールだろうから、北朝鮮でもきつとそうだろうと漠然と思っていた。

荒巻は言った。

「僕だけは自由に歩けるし、自由に撮れるんです。ファンキーさんはただドラムを叩いてくれ

ばそれでいいんです」

日本で「僕だけは北朝鮮を自由に歩けます」という人間と会ったら背筋がぞっとするかもしれないが、北京でこの言葉を聞いた私には何の抵抗もなくすつと身体に入ってきた。

「なーに、最初に中国に来たときは全部ひとりやってここまで来たんだ。今度はひとりじゃない」

それだけでもめつけもんである。

突然のテポドン発射

この本を書いている2012年の段階でも、日本国と北朝鮮は国交がない。

日本人はとかく「国交のない国に行くなんて……」と考える節があるが、私は中国で暮らすいろんな台湾人と接するにつれ、そんな抵抗感はもうまるでなくなっていた。

中国は台湾を自分の領土だと言い張っているし、台湾は共産党が自分の領土を不法占領していると言っている。そして国連が中国を正式に承認して以来、台湾という「国」は消し飛んだ形になってしまい、今もなお「国交」も何もあつたもんじゃないう状態になっている。

でも、現実にはこうしてたくさんの台湾人が「敵国」であるはずの中国に流れ込んできているし、日本人だって国交のない台湾にばんばん旅行に行く。民間交流と国の交流とは根本的に違う

ものなのである。

現に、日本と中国がまだ国交がなかったころから中国に來ているいろんな日本人こそが、現在の日中關係を作っているという現実を、私は目の当たりにしてきた。

「国交がないから行ってはいけない」

などと考えていたら、今の日中關係なんてあり得ないのだ。

ところが、出発を間近に控えた2006年7月5日、北朝鮮がスカッド、ノドン、テポドン2号の弾道ミサイル計7発を日本海に向けて発射し、それによって日本国は日本国民に対して「北朝鮮への渡航、滞在を予定されている方は、目的の如何いかにを問わず渡航を自粛してください」という措置を取った。

「我が国の安全保障や国際社会の平和と安定、さらには大量破壊兵器の不拡散という観点から重大な問題であり、船舶、航空機の航行の安全に関する国際法上の問題であること等により渡航自粛」ということである。

こうなつてくるとまた少し話が違ふ。

これによつて渡航をキャンセルしようという考えもあつたが、「渡航禁止」ならまだしも「自粛」はそれによる強制力や罰則はない。戦場カメラマンが渡航自粛の紛争地に行くようなもので、そもそもが「自己責任」なのであるからということ、結局は予定通り渡航することとなった。

パスポートの渡航先から「北朝鮮を除く」という条項が消えたといっても、私が初めて行く北朝鮮という国は、国交がない国であり、日本国政府が渡航自粛を呼びかけている国であったのだ。

「案内人」という名の「監視員」

2006年7月25日、私は初めて平壤空港に降り立った。生まれ育った香川県の旧高松空港ぐらい小さい空港である。

パスポートと、発行してもらったビザ、そして機内で書いた入国書類を渡すと、入国自体は別に問題はなくスムーズに手続きが済んだ。問題は手荷物関係である。

税関職員が、手荷物からトランクからすべてをくまなく探しては「ケータイデンワ？」とたどたどしい日本語で聞く。ここでは携帯電話、GPS機能が付いた機器いっさいは持ち込み禁止なのである。

手荷物検査でかなりの時間を食って、やっと外に出たらふたりの「案内人」が出迎えてくれた。荒巻はかなり親しそうにふたりと握手を交わしている。男性をパクさん、女性をキムさんと紹介してくれた。

この国では、基本的に外国人旅行者が勝手に出歩いたりすることはできない。必ず「案内人」と一緒に行動しなければならないのだから、これはもう「案内人」ではなく「監視員」である。

しかし要は彼らを「敵」と見るか「味方」にするかである。

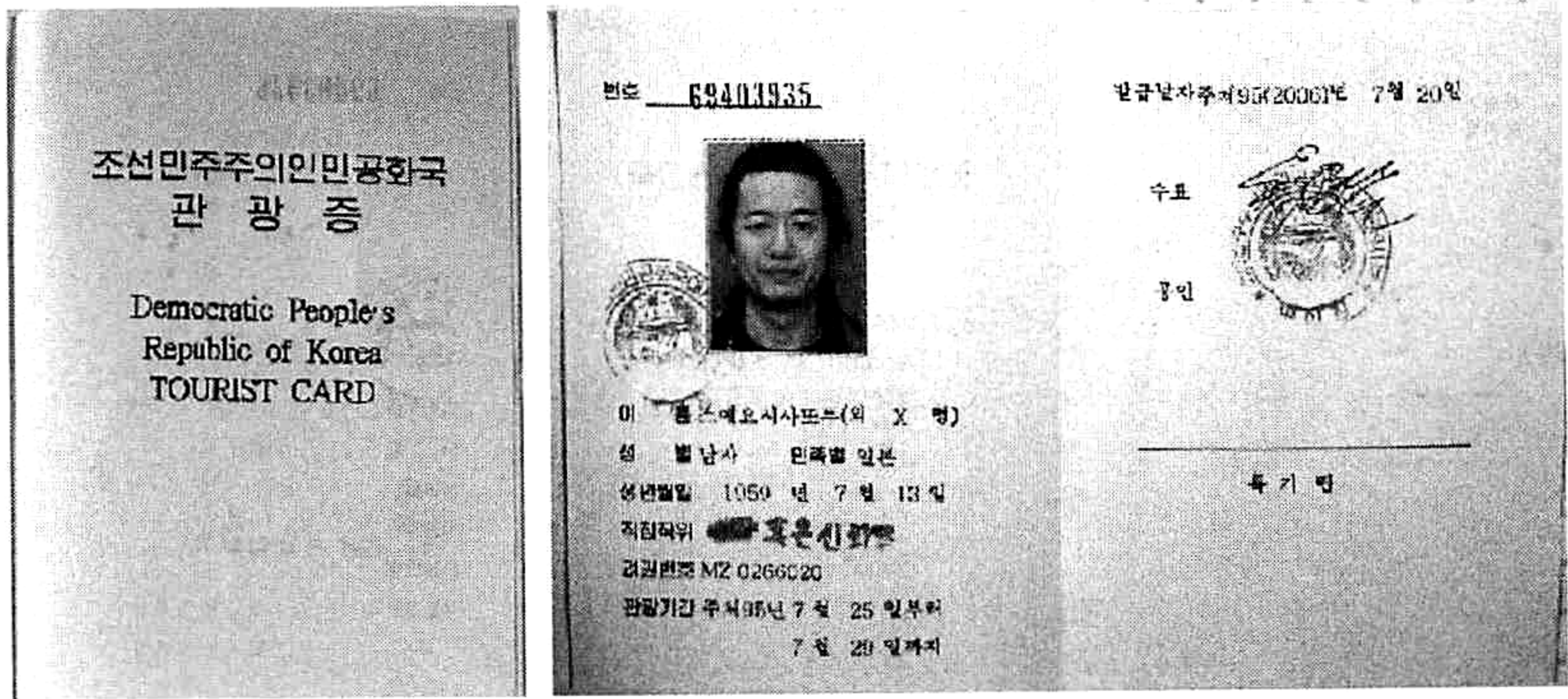
彼らを敵と見たら、それはもう「隠し撮り」しか方法はないが、荒巻は長い年月をかけてこの案内人を「味方」にしてしまっている。

その手段としては中国的には「ワイロ」なのであるが、イデオロギーの国であるここ北朝鮮では、それよりもむしろ「この行動が、実は将来的にお互いの国のためになるんだ」という考えを、長い時間をかけて説いてゆくことが必要である。当然ながら、彼らが普段耳にすることができない国際情勢などの情報も惜しまず与えてゆく。

しかし、いくら「味方」だからといって何でもやっつけていいというものでもない。彼らが我々のことを十分理解して自由な行動をさせてくれているのだから、こちらとしても彼らのこと、この国のことをよく理解し、何としても彼らに後々いろいろな危害が及ばないように考えてやらねばならない。

そうすることによって長年の間にお互いに信頼関係が生まれ、こうして普通の外国人が行けないようなところにも行けるし、撮ってはいけないようなものも撮れるようになるのだという。

通常「案内人」はこちらで指名はできないことになっているが、荒巻の「ケアンシー関係」はこれをも克服できてしまうようだ。「あの案内人とは相性が悪かった」とか「あの案内人は動きやすかった」とか荒巻の意見を上層部が吸い上げて、現状で自分が一番動きやすいふたり、このパクさんとキムさんに最終的には落ち着いたということらしい。



北朝鮮のビザ。ぺらぺらの紙で出来ている。



初めて降り立った平壤空港。想像以上に小さい。欧文表記と金日成の写真がほのほのとした感じ。

空港を出ると一行は、案内人が用意してくれたワゴン車に乗り込んだ。

空港から市街までの道は、私が初めて北京に行ったところ、まだ高速道路が開通してなかったころの「ジーチャンフルー机场辅路」（飛行場と市内を結ぶ幹線道路）にちよつと似ていて懐かしい感じがする。北京と違って並木道ではないが、舗装はされているもののちよつとガタガタと走る感覚、周囲に広がる田園風景、道端で自転車を修理する人民、何よりも街の造りやビルの建て方とかがどこことなく北京と似ているのだ。共産圏共通の「センス」なのかもしれない。

市街に近づいてくると北京の街との大きな違いに気が付いた。スローガン以外の看板、つまり「広告」がないのだ。

中国に最初に来たときの素直な疑問が「どうして社会主義国なのに広告やCMがあるの？」ということだった。「社会主義市場経済」つまり「制度は社会主義だが経済は資本主義」であるために広告をばんばん打つわけだが、北朝鮮は経済も社会主義なので広告を打つ必要がないのである。

市街地に入ると大仰な建物やモニュメントが目についてくるが、何となく「地味」なイメージである。「商店街」というものも見当たらないし、入り口にゴテゴテとした看板もなくハンゲルで書いてあるだけなので、何の店なのか私にはさっぱり分からない。「客を呼び寄せる必要」がないのだから、考えてみればシンプルそのものである。

このままホテルにチェックインするのかなと思つたら、車は市街地を抜けてちよつと住宅地っぽい地区へと走っていった。

6月9日高等学校に到着

入国初日、荒巻がまず最初に私を連れていったところは、キムイルソン金日成首席が6月9日にこの学校を建てろと指導した、ということから「6月9日大城第一^{テソン}中学校」と名付けられた高等学校である。

「6と9ならロックと読めるではないか!!」

私は何やら運命的なものを感じてドキドキした。

学校の門に入って突き当たり、一番奥の建物2階の講堂のようなところに案内される。すると間髪をいれず、音楽クラブの生徒たちが私たちのためにショーをやってくれた。チマチヨゴリを着て朝鮮の民族楽器を演奏したり、アコーディオンを弾きながら歌を歌ってくれたり、一応バンド形式の演奏も披露されたが、残念ながら「ロック」というには程遠い演奏であった。

そして生徒たちはステージを下りてきてお客さんと記念撮影……。

……と普通の観光客ならここまでである。彼女たちに見送られて学校を後にするのであるが、いきなり荒巻が案内人にこう聞いた。

「ドラムセット、もう1台用意してくれてる？」

案内人は学校の先生にそれを伝え、先生は大きくうなずくと、生徒たちと一緒に裏からもう1台のドラムセットを運んできた。

荒巻の今回の目的は、とにかく私にこの国でドラムを叩かせようということだ。中国でだってそれで大きな変化が生まれたのだ。それさえできればなんともなる。そんな考えがあったようだ。

用意されたドラムセットは日本のYAMAHA製、とりあえず叩けないことはないのだが、いろいろ部品が壊れていたり、シンバルがブリキ板のようなちやつちいやツで、ハイハットなんか強く踏んだらそのまま反対に反ってしまったりする。私が高校のころ初めて買ってもらった一番安いドラムセットを思い出す。

「ファンキーさん、じゃあぶっ叩いてください」

セッティングができたところを見計らって、荒巻が私にそう言った。

私はたいがいの国に行ったらまずドラムを叩く。中国でもそうだったし、タイでもマレーシアでもシンガポールでも、アメリカでもイギリスでもドイツでも、東ベルリンでだってぶっ叩いた。ドラムを叩かなかつた国を探す方が難しいぐらいである。

音楽が国境を超えることは十分に体感している。だがこの国は少々特殊である。はたしてそん



講堂のようなステージで生徒
たちが民族音楽などを演奏し
てくれる。



アコーディオンと歌の演奏。こ
の国ではアコーディオンは楽器
の花形である。



ショーが終わって記念撮影。後
列の右から5人目に見えるの
は、一緒に渡航した妻。

なことをしてもいいのかという不安も少々あるし、そりゃ荒巻は長年の付き合いであっても、この案内人の反応、学校側の反応など気になる要素はたくさんある。

私はちよつと深呼吸してこう言った。

「とても大きな音が出ますからね、覚悟してください」

カメラを向ける荒巻の手に力が入る。

荒巻の長年の研究は、膨大な量の北朝鮮の映像によって北朝鮮内部で起こっている縦の変化を分析するというものだ。ファンキー末吉という人間がドラムを叩いて、それがこの国にどのような化学反応を起こさせるか、その表情の中にこそ「今の北朝鮮」がある。ゆえにこのときに何の反応もなければ、このプロジェクトはこの時点で失敗ということになる。

ドババババ……。

生徒たちは一瞬びつくりした表情をしたが、すぐに興味津々の表情に変わった。荒巻はそのいろいろな表情をくまなくカメラに収めてゆく。特にドラム担当の美少女は目をくりくりさせて私のドラミングを凝視していた。



渾身のプレイでドラムを叩くと、彼女たちの表情がみるみるうちに変わってゆく。



私の演奏に驚いていたドラムの美少女に叩いてもらって、指導する。

中国で初めてドラムを叩いたとき……それは黒豹 (HeiBao) の練習場だったのだが、どここの馬の骨とも分らない観光客にどうしても言われて、「じゃあ1曲ぐらい何か叩かせてやるか」ということでスティックを渡されてぶっ叩いたときの、黒豹 (HeiBao) のドラマー「趙明義」ジャオミンイーの反応とよく似ている。

人の心と心にはいつも「壁」があるが、それがあまりにもびっくりすることによって、その「壁」が粉々に崩れ去り、後は乾いたスポンジに水を与えるようにその「メッセージ」が心の中に吸収されていったりする。カルチャーショックがその人間を「真っ白」にして、それを与えた人間色に染めてゆくのだ。

「そうだ、俺がドラムさえ叩けばこの国だってロックに染まるんだ」
などという考えがどれだけ甘かったかは、後に身に染みて分かることとなる……。

平壤の街を歩く

荒巻が平壤に来たら、まずやるのは街を歩くこと。まずこれをやって、この街の空気に慣れることを目的にしているという。

翌日私は歩きながら、初めて来た平壤の街を観察した。車の中からでは見えないいろんなものが見えてくる。共産圏独特の「整理された」街造り、大きく違うところは、車が少ないことと、

広告がないということ。そして北京でいう胡同フートンと呼ばれる路地裏とか、ごみごみしたものがいっさいないことである。

平壤は昔「柳京リュギョン」と呼ばれていた、と案内人から教えられたが、なるほど市内の中央を流れる大同江テドンガンのほとりには、柳の木が多く植えられていて格好の散歩道となっている。

荒巻はもうこの街をくまなく歩いたというが、中国でも昔は外国人に開放されているところとされていないところがあつたのだから、北朝鮮だってきつとそうだろう。

「今、私が歩いてるところはひょっとしたら、普通の観光客は歩くことができない場所なのか？」などと考えたらちよつとドキドキしてくる。

「荒巻さん、ここではカメラ、ちよつとやめてくださいね」

案内人にそう言われれば、荒巻もそれを無視してカメラを回したりはしない。

要は「信頼関係」なのである。例えば隠し撮りをするような人たちには、案内人だって自分の身を守るために行動を制限せねばならないが、長年の付き合いで今まで何も問題が起こっていないなら、その制限ははるかに緩くなる。

「平壤は劇場都市で、観光客に見せる姿は全部作られたものだから信用してはいけない」と言う「専門家」と呼ばれる人の話を思い出した。

はたしてそうなのだろうか……私は平壤の街で暮らす人民の姿も注意深く観察する。

昨日の学校で出会った子供たちの笑顔……あの子たちの笑顔も「作られた」ものなのであろうか……ドラムを叩いた後の、あのびっくりしたような感激したような表情も、全部「作られた」ものなのだろうか……。

そんなことを考えていたら、いきなり面白いものが視界に入った。遠くに見える簡単なバラックでできたような屋台のひとつで、お釣りでもめているのか、客のおばちゃんと店のおばちゃんが取っ組み合いのケンカを始めたのだ。

案内人は見なかったようなふりでなんとなく気まずい空気が流れたが、私は思わず笑みが浮かんでくるのを抑えられなかった。

「この街にだって人民がいて、みんな一生懸命暮らしているんだ」
そう思うと、もう微笑ましくって仕方がない。

北朝鮮の専門家と呼ばれる人たちは、きっとこの街で人民と接したことがないのだろう。もしくは来たことすらなく、机の上だけでこの国を分かったようなつもりになっているのだろう。あんなものまで私たちのために費やさねばならないことか……。

「どうですか？ 平壤の街は」

ニヤニヤしながら歩いていたら、案内人が私にそう尋ねた。

「はい、とても好きになりました」

まだ旅は始まったばかりである。その街が好きか嫌いかは、その「街の人」が好きか嫌いか、ということなのである。

3本しか弦のないギター

次の日は半日平壤を観光した。

個人的には観光はあまり好きではないのだが、一応「観光旅行」ということで入国しているのに「どこも観光せずに毎日何をしてるんだ」となると、パクさんや受け入れ態勢としてはちよつとまずいことになるから仕方がない。金日成主席の銅像やら凱旋門やら、その他たくさんのバカでかいモニュメントなどを回って、そこに必ずいる説明のお姉ちゃんの話を生懸命聞く（ふりをする）。

観光スポットでの「案内人」の説明は、当然ながらこの国のプロパガンダを大げさに説明するものでしかないが、中国が長い私は別段それをどうとも思わない。

「あんたは洗脳されてるんだよ」

とか、それに反論する必要もない。要は、

「自慢話が好きだなたちなんだな」

と思えばいいのだ。つまらない話にでも、大きくうなずいてあげたら相手は喜ぶではないか。

これ、中国で覚えた処世術である。

そしてぼちぼち気を許し合ってきた案内人相手にも、政治的な論争は極力避ける。

私は幸い出会ったことがないが、中国でも日本人に対してすぐ南京大虐殺だの戦時賠償だのと話を持ちかける中国人がいるが、そんな人たちはとどのつまり、その日本人と仲良くするつもりがないのである。同様に、北朝鮮人と見ると拉致の話を持ちかけるようなことをしたって意味がない。どの道、それは私がこの国で出会うレベルの人間に言ったって仕方のないことなのだ。

午後はまた学校へ行く。今日は彼女たちのいつも演奏している曲を「ロック」にアレンジしてやろうというつもりである。私たちの車が学校に着くと、生徒たちが下まで迎えにきて、朝鮮式に両方から腕を組んで先日の講堂（いわゆる「部室」になるのかな）まで連れていってくれる。

別に私だけが特別なわけではない。お客さんが来ると、基本的には必ずそうするのである。

部室に上がって、まずそれぞれの楽器をチェックした。昨日の段階では気が付かなかったが、ベースは4本あるべき弦が3本しかないし、ギターにいたっては6本あるべき弦が3本しかない。楽器を詳しく調べようとすると、学校の先生がバツの悪そうな顔をする。

共産圏の国々では自分の都合が悪いものを極力見せないようにするということは、私は中国での経験でよく理解している。この国ではそれがもっと顕著であろう。

でもそれだけに、むしろ躊躇しながらにしても、結果的にお客さんである私にそんな恥部をあけつぴろげに見せているということが、私に荒巻とこの学校との関係の深さを強く感じさせた。

「どうなんですか？ これでちゃんと演奏できますか？」

ギターの弦が3本だけではコードを鳴らすことはできないが、幸い残っているのは低音弦である。ロックフレーズをベースとユニゾンでプレイするなら可能ではある。

「ロックは楽器でやるもんではない!! 魂でやるものである!!」

私の心に火がついた。どんなことになるやら分らんが、この子たちにこの国で初めての「ロック」をやってもらおう!!

美少女たちが初めて触れる「ロック」

まずは彼女たちに（実際は先生が選ぶのであろうが）1曲選んで演奏してもらおう。

演奏してくれたのは「統一アリアン」という曲。こちらでは誰もが歌える「革命の歌」だという。2回ほど演奏してもらって、私はそのメロディーを聞きながらすぐさまメモしてゆく。

「ではアレンジしますんで、みなさんちよっと休憩してください」

学校の先生は私を別棟の応接室に連れてゆく。何が始まるのか理解できない荒巻は、不安そうに私についてきてこう聞いた。

「アレンジするって、楽器もなくその場でできるもんなんですか？」

私は小学校のころ、音楽のテストの点数はすこぶる悪かったが、なぜか聴音の試験は満点だった。スピーカーからピアノの音を流して、

「ドの音はこれです、ではこれは何の音でしょう」
というアレである。

他の人は「どうしてそんなもんが分かるの？」と驚いていたが、小学校の試験にあったぐらいだから、きつと要は「コツ」なのであろう、私にとっては「どうしてそんなもんも分からないの？」という感じである。

音楽教育を受けたことがあるわけではないので「絶対音感」こそないが、「ド」の音さえ分かれば、楽器がなくても聞いた音をすぐに譜面にすることができるとも、また、思いついたメロディーやコードは楽器がなくてもすぐに譜面に書けるので、他の音が鳴っていない別室にさえ行けば楽器なしでアレンジができるのだ。

小一時間ほどかけてそれぞれのパートを譜面にして、部室に持って行ってみんなに渡した。

省略記号とか初めて見た特別な記号以外は、彼女たちにもすぐ読めた。楽譜こそは「世界共通言語」なのである。

ちなみに中国には「数字譜」というものがある。

「ド・レ・ミ」というのを「1・2・3」と数字で表して、8分音符、16分音符などは五線譜の

音符の旗の数だけ、8分音符なら1本、16分音符なら2本と線をその数字の下に書いておくのだ。この方式は覚えれば非常に簡単で便利なものなのであるが、残念ながら日本でこれを知っている音楽家はほとんどいない。日本ではめんどくさくても必ず五線譜で書くのだ。

北朝鮮の子供たちは数字譜も五線譜も両方使っていた。「ところ変われば」である。

ロック的なドラムの叩き方や、ベースのグリッサンド奏法、ギターのチョーキングなど、彼女たちがやったことのない奏法を個別に教えてゆく。

まずはドラムであるが、新しい叩き方を教えるのは時間的にみて無理そうなので、基本的には原曲と同じリズムを基本にした。アップテンポの8^{エイト}ビートの曲なので、Bメロをハーフテンポで叩くように指示すると、ドラムの美少女は目を白黒させていた。ロックでは当たり前の変化の付け方なのであるが、きつとこの国ではそんな叩き方を耳にすることはなかったのだろう。

彼女はきつと、性格もそのルックス同様にほわーっとしているのだろう。理解不能なフレーズを与えられたら、不二家のペコちゃん人形のように片方の口元をちよつと上げながら首を傾げるさまがとてもかわいい。

そして、いざ叩くぞとなっても、叩けなければケタケタ笑い、叩けたら大喜びでまた笑う。この「笑顔」すら作られたものだったら、それはほんとにアカデミー賞級の演技力である。

ベースの大人っぽい美女はこの音楽クラブのリーダーであるという。170センチを超えるタツパで貫禄もあり、部員全員から一目置かれているように見受けられる。ドラムの美少女にドラムを教えているときにも、「あんたそれ、違ってるわよ」と言わんばかりに口を出していたが、いざ自分の番になって、弾けないフレーズに出くわしたときにはさすがにバツが悪そうである。

簡単なフレーズばかりで作ったので、基本的に「弾けない」という部分はないが、ベースをフイーチャリングする部分からギターをフイーチャリングする部分へのチェンジのときに、「グリッサンド」という奏法で、4弦を弾いてから弦を押さえている部分をずらすことによって、低音で「ブォーン」と効果音を出すのを見せ場として作っておいたのだが、それには少してこずっていったようだ。日本だととてもポピュラーなこの奏法も、この国ではやはり見たことも聞いたこともないものであろう。

ちよつとバツが悪そうにはにかみながら見せる笑顔は、それでもリーダーとしての威厳と、16歳のあどけない少女の面影が同居していて非常にかわいい。

そしてギターなのであるが、ドラムやベースの少女からしたらさらに2年下であるという、これまた美少女で、この子がまたコロコロとよく笑う。「箸が転んでもおかしい」という表現がこの国に当てはまるのかどうかは分からないが、とにかくこの子の印象は「笑顔」だった。

ギターが上手いか下手かは分からない。そりゃそうだが、弦が3本しかないのだからまともに弾



部室のドラムセットはお世辞にもいい楽器とはいえないが、何とか調整して少しでもいい音が出るようにしてあげる。



ひとりひとり個別にそれぞれのパートを教えてゆく。



大人っぽいベースの女の子はグリッサンド奏法にてこずっていた。

けるわけではないのだ。私はそれでもフィーターチャリングする部分を作らねばと、間奏のベースのフレーズのハモ（ハーモニー）のパートを弾いてもらうことにしていた。これなら低音弦3本で弾けるフレーズだからである。

ベースがそのフレーズの最後をグリッサンド奏法でシメるように、ギターはベンチャーズがよく使う「テケテケフレーズ」でシメることにした。

少女はこの奏法にも目を白黒させていた。これを弾いたことがないということは、この国にはベンチャーズも入ってきていないという大きな証明である。弾けなかったら弾けなかったでケタケタ笑い、弾けたら弾けたでケタケタ笑い、北朝鮮の人たちはロボットののように画一的で、能面のような笑顔しかないという私の先入観は、彼女たちによって見事に打ち砕かれた。

キーボード奏者は、始終私に対して「緊張」していた。むしろ「びくびくしていた」という方が正しい。おそらく完璧主義者なのであろう、少しでも弾き間違えたりすると、ビクツとしておびえた顔で私を見る。

「將軍様じゃないんだからそんなにおびえなくてもいいんだよ」

と言いたいのだが、そんなことを案内人に通訳させるわけにはいかない。

「やっぱり上から恐怖で下を押さえつけてる社会なのかな……」

と思ってみたりもしたが、それだったら「お客様に粗相をしました、すみません」という感覚

で、むしろ隣に立っている学校の先生に対しておびえるはずではないだろうか……。

彼女が私に対してどんな感情を持っていたのかは、ずっと後になって初めて分かることとなる。

そこで私は大きなミスを犯していた。キーボード奏者は実はふたりいたのだ。

ひとりだと思っていたので譜面を一人分しか書いていない。もうひとりのキーボードの子は譜面も渡されず、何もしないでずっと定位置に座っていたのだという。

それが分かったのは、この日の最後に彼女が勇気を出して先生に直訴に来たからである。

「先生！ 私は決して弾けないわけではないのに、どうして私にだけ譜面をくれないんですか？」

この話を帰りがけに先生から聞いた私は、彼女に深く詫びを入れ、帰ってからキーボードパートをアレンジし直して、もうワンパート書いてくることを約束した。

平壤6月9日高等学校・軽音楽部
ファンキー末吉 著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,500 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7240-4

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)